

第一章 常樂生活への道しるべ 七、強者とは神を随時に呼びうる人である

絶望、失意、落胆の極みにおいても、自己よりいつそう偉大なるもの——「なんらかの形における神」を呼び続けることのできる者は、やがてはその困難を切り開き、その絶望から起き上がることができる人です。神を呼ぶことのできない人が絶望したときは、それこそ本当に絶望です。なぜならその人は「いつそう大なる力」より汲むことを知らないからです。いかに平常強き者も、自己に限られたる力以上の力に汲むことを知らない人は弱き人であります。

しかし、われわれは失意の時、危急の時、困難の時ばかりに神を呼ぶのでは、それは危急を逃れるに役立つばかりで、常に偉大に生長する道ではありません。常に偉大に生長するためには、常にわれらは神を呼ばねばなりません。その人がいかに大きく生長するかは、その人の神を呼ぶ度合いで定まるのです。神を呼ぶのも「外にある神」を呼ぶのでは。それはかえって依頼心を増長せしめることになります。それは偶像崇拜になります。神を呼ぶのは常に自分に対して呼びかけねばなりません。自分の内に「無限者」がある。その無限者、

——無限能力者、全能者に対して呼びかけねばなりません。これに呼びかける時、天地に満つる無限の親様の力が自己自

身の内に出口を開いて、滾々と、必要な力を自分自身の内に湧き出させてくれるのであります。

第二章 無限能力を汲む道 五、小我の崩壊と感謝の湧出

ところが、自分が三文の価値もない人間だと気がついたときには「我」の自分というものがくだける。「我」の自分というものがくだけてしまふと周囲のいっさいのものがありがたくなってくるのであります。こんなに三文の値打もない自分だのにみんながいろいろと気にかけて下さるということがありがたくなつて感謝されてくる。この感謝はまだ本物ではない。実相の自覚からくる深遠無限のありがたさではなくて、外から与えられるありがたさであります。それでも感謝の念というものは味わっているうちに外と我との関係が解つてき、自他一体感から天地と我と一体であるところの生かす力に目覚めてくるのであります。すなわち小さい「我」がくだけだときに、天地一切から自分に働きかける自分を生かそうという不思議な力に目覚める機縁が与えられるのであります。ちょうどゴムの風船玉の中の空氣が、このゴムの申だけが自分の世界だと思つて、自分の力だけで意氣揚々と空中に浮いていたのが、そのゴムがパチンと割れたために、中の空氣と外の無限の空氣とが一緒になった。そして自分を空中へ浮かしていたのは、風船玉の申の空氣だけの力ではなく、実は外にある無限の浮かす力で押し上げられていたのだと気がつくようなもので、そこから感謝の念も生まれ、今まで世の中を冷たいものだと思つていたのが、冷たくないものだとかわかつて、心はのびのびとして自然の力が回復してくる。そして

自然に健康になつてくるのであります。

しかしまた、自分をそんなに三文の値打もないものだと思いたくない人で、どこまでも自分を本当に価値があると思いたいならば、決して身体が弱いからとか、周囲が悪いからとか、自分自身の生きる力以外のものに責任を負わせて自分の働きのないことを卑怯に弁解せぬがいいのであります。いっさいの口実を捨て、いっさいの自己弁解を捨て、ただ驀らに自分の理想とするところに進んで行けばよいのであります。自分が「三文の値打もない悪い奴だ」と思うのは、仏教なら真宗的な行き方で、「我」を否定し、その否定し尽くしたあげくひとりでにいっそう大きな我——大我に一致し、阿弥陀仏が自分を生かしている。さらに進むと、自分のうちに阿弥陀仏が生きているということになり、真実無礙自在な報恩（自他一体の動き）の働きができるようになるのであります。これと反対に、いっさいの口実を捨て、いっさいの自己弁解心を捨て、ただ驀らに我れ神の子なり、無限力なりと信じて精進また精進してゆくのは仏教なら禅宗的な行き方であります。この他力的な行き方も自力的な行き方も、結局は、無限の神の力が、自分の内に入り込んで来て、それが自分のうちに働いている——という大自覚に這入らなければ本物にならないのであります。「他力」といっても自分を離れた外の力で極楽浄土へやつてもらえると思つたり。「自力」といっても、ただ小我の有限力で遮二無二突進することだと思つていては、どちらも本物でないから、真実無限の力が出て来ないのであります。真実無限の力を出すには、他力的信仰でも自力的信仰でもその極致の心境に透徹して限りなき完き大生命のいの

ちが自分の内に流れ込んできて、それが常住自分のうちに生きていくという悟りにまで到達しなければならないのです。われわれを生かす真の信仰はこの他力と自力との十字架の十字架の上に、^{まんじ}卍の上に、打ち建てられた「生長の家」の信仰にまで一致して来なければならぬのであります。

聖經『天使の言葉』講義

(一)

天^{てん}使^{つかい}また語りたまう——
言葉は天に舞いて五彩の虹を現じ、
地にひろがりて最と妙なる交響樂を奏すれば、
天童たちこれに和して
花爛漫^{らんまん}の樹枝^{こえだ}を手にし、
身に羅綾^{うすもの}のいと妙なるを纏^{まと}い、
翩翩^{へんぱん}として御空^{みそら}に舞えば、
花葩^{はなびら}さんさんと地に降りて
地上はさながら妙樂の天園と化したりき。

(二)

さて天^{てん}使^{つかい}の言葉はのたまわく——
われは完き神の啓示者なり。
神の与え給いしところのものを
吾れも亦汝^{なんじ}らに与えん。
神の語り給いしところのものを
吾れも亦汝^{なんじ}らに語らん。

吾れは創造神より遣わされたる者なり、

吾れは創造神の道なり、

吾れは創造神の波動なり。

吾れは創造神より来りて汝らを言葉にて照り輝かさん。

創造神の光波は吾れにして

吾が光波の射すところ

暗黒なく

病なく

老なく

死なし。

信ずる者は限りなき生命を得て永遠に輝かん。

我は創造神の言葉なればなり。

吾が言葉は吾が息の言う処に非ず、

神、我れと偕にありて、

吾も亦吾が言葉の内に神の声を聞くなり。

吾は喇叭なり。

(三)

汝らよ――

吾れ個神を善しと言う事勿れ。

形に現れたる神を讃むること勿れ。

吾に宿る善きものは皆普遍なる神より来る。

汝ら吾が示すところの神を崇めよ。

吾れを崇めよと言うには非ず。

吾れはただ天使なり、

吾れみずからの本性の神なることを観たれば、

吾れ汝らの本性の神なることを悟らしめん。

汝らの先ず悟らざるべからざる真理は、

「我」の本体がすべて神なることなり。

(四)

汝ら億兆の個靈も、

悉くこれ唯一神靈の反映なることを知れ。

喩えば此処に一個の物体の周囲に百万の鏡を按きて

これに相對せしむれば一個もまた百万の姿を現ぜん。

斯くの如く汝らの個靈も

甲乙相分れ、

丙丁互に相異なる相を現ずるとも

悉くこれ唯一神靈の反映にしてすべて一つなれば

これを汝ら互に兄弟なりと言う。

すべての生命を互に兄弟なりと知り、

すべての生命を互に姉妹なりと知り、

分ち難くすべての生命が一体なることを知り、

神をすべての生命の父なりと知れば、

汝らの内おのずから愛と讃嘆の心湧き起こらん。

(五)

されば汝らよ、

肉体の外形に捉わるること勿れ。

外形によつて兄弟を相隔つること勿れ。

外形は唯自己の信念の影を見るに過ぎず。

無限の生命が、

此時^{このとき}天の童子のうちより、
緑色の羅綾^{うすもの}にその玉の如き身を包める
いと臍^{へら}だけたる一人進み出で、
「されど生命の長老よ」
と呼びかけて反問^{はんもん}す。

(六)

「近代の科学者は頭脳にて物を思考し、
神経細胞にて物を感じると言うに非ずや。
頭脳なく、神経細胞なければ
如何^{いか}にしてか、物を考え、
物を感じずることを得^うべけんや」と。
天^{てん}使^{つかい}再び答え給^{たま}わく――
汝^なら、

「肉体細胞」と呼ぶ物質のうちに
快あり苦あり感覚ありと思うは虚妄^{まよひ}なり。
肉体は本来「無^む」なるが故に。
それはただ想念の影なるが故に、
吾らが肉体を忘れて忘我^{ぼうが}の境^{きよう}にあるとき、
吾らの肉体は最も完全にその職能^{はたらき}を發揮するなり。
肉体はその背後に「心」ありて
想念のフィルムを回転^{くわん}して
「現世^{うつしよ}」の舞台面に肉体の映画^{えいが}を現^{あらわ}せるに過ぎず。

(七)

現世^{うつしよ}に於ても優れたる科学者は

人間を肉体なりと観ぜず、
感覚は肉体の背後にある心の感じなる事をあきらかにせり。
嘗て伊太利の大医^{たいい}ロンブローが
或る神経病者を取扱^{とく}いし記録を見ずや。
患者は感覚の転位を起して
眼球をもつて物象^{ぶつざう}を見ることを得ず、
指頭^{ゆびさき}をもつて物象^{ぶつざう}を見ることを得しにあらずや。
指頭^{ゆびさき}には眼球なく、
網膜なく、
視神経なし、
されど彼の指頭^{ゆびさき}はよく物象^{ぶつざう}を見ることを得しに非ずや。
この事實は、
感覚が肉体になく、
神経細胞になく、
その背後にある「心」に在ることを立証するものなり。
「心」にして見ることを肯^{がえ}んずれば、
指頭^{ゆびさき}も尚物象^{ぶつざう}を見るを得べく、
また其の指頭^{ゆびさき}すら無くして
なお物象^{ぶつざう}を見、ものを聞くことを得べし。
天眼^{てんがん}天耳^{てんじ}と称するもの即ちこれなり。
かの楽聖^{がくせい}ベートーヴェンの
有名なる諸作品は
彼の肉体の耳聾^{じそう}いて
物体の音響を殆ど弁別^{べんべつ}し難き晩年に到りて作曲せられしに非
ずや。
彼の肉体の耳は聾^{ろう}いたれども

心の耳ひらけたれば、

こちらの耳はピアノの鍵盤に触るるに従いて
その微妙なる奏曲を分別し得たるなり。

かくの如く人は

心だに肉体に捉われざれば

眼なくして物を見、

耳なくして物を聞き、

体なくして物に触るることを得るは事実にして理論にあらず。

(八)

この時、天の童子反問す――

「主よ、眼なく耳なくして、物を見、物を聞くを得るは聞き
しことあれども、

体なくして物に触るることは不可能にあらずや」と。

天の使こたえ給う――

汝ら近頃の心霊科学の実験を見しことなきや。

被実験者は椅子に緊縛せられて一毫もその肉体は動く能わず
して、

尚、凝念の力によりて

或は机を空中に浮揚せしめ、

或は手風琴を空中に飛翔せしめ、

或は空中のメガホンより声を出ださしめ、

或は空中より手風琴を奏せしひることを得、

これ体なくして物に触れ物を動かし得る実例なり。

心が「物」を動かすことを得るは

「物」と心とが全然別物に非ずして

「物」は「心」の痕跡なるが故なり。

例えば美術家が巧みなる絵を描くに

絵は美術家の心の痕跡にすぎずして、

絵は美術家そのものに非ざるが如し。

斯くの如く人間の肉体も人間の心の痕跡にして

人間そのものには非ざるなり。

念に従つて、

肉体の相貌或は美しく或は見苦しく変化し、

健康もまた念に従つて変化す。

人この理をさとれば

意のままに自己の肉体を支配して変化せしひることを得ん。

(九)

迷妄は云う「人とは肉体也」と。

されど肉体は人には非ざるなり。

「人」の実相は神の子にして、

生きとおしの生命なれば

生滅つねなき肉体を以て代表せしめ得るものには非ず。

すべて生滅常なきものは

実体に非ずして

ただ信念の反映に過ぎず。

信念を変えればまたその相も変化せん。

物質は事物の実相に非ず、

ただ念に従つて生滅す。

物質は念の影響なるが故に、

それ自身意識を有せず、

感覺を有せず、
痛みを感じず、
病を感じざるを本性とす。
然るに物質にあり得べからざる痛苦を
物質なる肉体が感ずるは、
唯「感ずる」と云う念あるが故なり。
肉体に若し催眠術を施して
彼の念を一時的に奪い去れば、
針にて刺すとも痛みを感じず、
メスにて切るとも痛みを感じず、
無痛刺針、無痛施術等自由自在に行わるるに非ずや。
「念」全く去りたるものを死体と云う。
汝ら死体が痛みを感じたるを見しことありや。
死体は「念」去れるが故に痛みなきなり。

(十)

「念」に従つて一つの組織を現せるもの
この「生ける肉体」なり。
されば「生ける肉体」は念に従つてその状を変ず。
「健」を念ずれば身健かとなり、
「病」を念ずれば身に病を現ず。
されば汝ら常に「健」を念じて
「病」を念ずること勿れ。
若し、汝の「念」肉体を去れば、
生ける肉体死体と變じ、
死体はその状態を維持する「念」の力の去ると共に、

分解して宇宙の要素に復歸せん。
肉体を去りたる「念」は、
その念の力にてなお一つの個性を持続し、
幽界に於て生活をつづけん。
汝らの靈魂と称するものは、
「念」の淨まるに従つて
それに相応わしき高き靈界に入り、
「念」の淨まらざるものは、
それに相応しき環境を「念」の力にて仮作し、
その環境にいて苦しまん。
されば汝ら、
常に心を高く持して
苟も惡を念ずること勿れ。
苟も不淨を念ずること勿れ。
また苟も苦を念ずること勿れ。
また苟も病を念ずること勿れ。
惡と不淨と苦と病とは、
神の創造り給いしものに非ざれば、
ただ汝らの「念」の妄想せる幻に過ぎざるなり。
汝ら暗を見て、
暗を實在すと信ずること勿れ。
暗は唯是れ光の非在に過ぎず。
惡と不淨と苦と病とは
ただ神の創造の無をあらわす。
神の創造なければ
其処に實在なし、

實在の「無」——これを称して悪と云い不浄と云い苦と云い病と云う。

されば汝ら何の故に實在に非ざる苦を恐るるや、何の故に實在に非ざる病を恐るるや、

暗の中にいて恐怖すれば

枯尾花も幽霊の姿を現す。

斯くの如く心の暗の中にいて病を恐怖すれば

非在の病も實在の如き姿をもって現れん。

されど病は實在に非ずして

ただ恐怖の反映に過ぎず。

心の暗の中に光射し来りて

汝らの恐怖心消ゆるとき

病はおのずから自消自滅して本来の「無」を露わさん。

(十一)

されば汝ら、

心の中に常に円満完全清浄なる實在の相を描けよ。

常に円満完全無病なる神の子の相を描けよ。

人は神の子にして其の他の何者にも非ざるなり。

円満完全なる神より不幸は生ぜず、

円満完全なる神より病は生ぜず、

不幸と病は唯これ五官の妄想に過ぎざるなり。

汝ら病を恐るること勿れ。

五官の感覚に描かれたる病は

一毫も汝らの生命の真相を病ましむること能わず、

一毫も汝らの生命の真相を不幸ならしむること能わず、

如何なる病も

如何なる不幸も

ただ「生命の真相」の表面を掩える

叢雲の如き幻に過ぎざるなり。

その幻はすべて

「生命の真相」を知らざる迷より生ず、

汝ら「生命の真相」を知り、

迷滅すれば恐怖滅し、

恐怖滅すれば

一切の不幸と病おのずから滅せん。

(十二)

かく天使語り給えば——

虚空に蓬莱島の如き理想郷実現し

島の頂には水晶にて造れる宮殿ありて

その叢も柱も悉く水晶なり。

天使その主座に坐し給えば

天童たちその叢を透過きて天より舞い降りて

悉く天使の周囲に輪を描く。

此時いずこともなく天楽の音囀り、

天童これに和し羅綾を流の如く引いて舞えば

島をめぐれる紺青の海に

ヴェニスのごノドラ船の如き

半月の船静かに、迂りていと平和なる状態なり。

此の時天使の声水晶宮より出でて虚空に轟き、

地を指して宣わく、

「見よ、これ実相世界なり、

実相世界は父の国なり、

天国なり、

浄土なり。

父の国には住居多し。

実相世界の住居は悉くこれ「生長の家」なれば

住民に飢えなく、

悲しみなく、

争いなく、

病なく、

万の物ごとごとく意に従って出現し、

用足りておのずから姿を消す。

円満具足清浄微妙の世界、

これ実相世界、

これ汝らの世界、

そのほかに世界あることなし。」

斯く天使の宜うとき、

天使の指し給う方を見れば

『生長の家』無数に建ち並びて

薨列をなし

炊煙春の霞の如く棚引きて

住民悉く鼓腹撃壤し、

其処はただ常楽の世界を現じたりき。（聖經終）